



TAKING OFF

大阪学院大学/大阪学院大学短期大学部
国際センター ニュースレター

Vol. 20 Fall, 2013



1. Hello from All Corners of the World!

今号では、前号に引き続き、本学の卒業生を紹介します。最初は、在学中にハワイに交換留学をし、現在はハワイパシフィック大学のMBAプログラムで勉強中の北村 麻衣さん。次に、在学中にドイツのトリア大学に交換留学をし、現在は台湾で日本語教師として働く中川 瑞己さん。最後に、在学中に韓国のスンチョンヒャン大学に交換留学し、現在は長年の夢であるJICAの青年海外協力隊への参加を目指して、京都のNGO法人でインターンをしている高木 和俊さんです。それぞれ異なる道に進んだ3人ですが、夢を追いかけるという姿勢は共通しています。大学生にとっては厳しい時代ではありますが、在学生の皆さんも先輩たちのように大きな夢を持って学生生活を送りましょう。



MBAプログラムの友人たちと
(本人右から3人目)

北村 麻衣 (2012年国際学部卒業)

OGU学生のみなさん、Aloha! ハワイ州オアフ島にある、ハワイパシフィック大学のMBAプログラムで勉強を始めてから約1年になります(2013年7月現在)。今は夏休みですが、オンラインの授業を取りながら、リゾート開発に関連した不動産会社でマーケティング部のアシスタントとしてインターンをしています。

留学先をハワイに選んだのは、単純にハワイが好きだったからです。気候や現地の人々が好きなのはもちろんですが、私の専攻であるホテルや旅行事業を学ぶのにも最適な場所だと考えたからです。実際のところ、大学院の勉強は大変ですが、自由時間にはプール沿いで勉強したり、ジョギングをしたり、友達とワイキキの方へ出かけたり、さらにはハワイ商工会議所のメンバーとしてたくさんのイベントにも参加したりして、毎日を楽しんでいます。

ここに至るまでの経緯ですが、最初に留学に興味を持ったのは高校生の時。英語を話せるようになりたくて、英語の勉強を真剣に始めました。そして、大阪学院大学に特待生として入学し、2年次でハワイのカピオラニ・コミュニティ・カレッジへ約1年間の交換



大学院のマーケティングのクラス
(本人前列右端)

留学に行きました。留学生活がスタートしたころ、日本であれほど英語の勉強をしたのに、英語で満足に会話すらできず、自分の英語力の低さに愕然としたのを今でも覚えています。毎日最低6時間は英語の勉強をし、大学生活やフラダンスを通して現地の人々と積極的に交流をしながら過ごした楽しい一年は、あっという間に終わってしまいました。帰国後、就職活動を始めましたが、自分の今やりたいことが何なのか見つめなおした結果、英語を使って旅行事業やビジネスについて更に勉強したいと思い、海外の大学院に進学することを決めました。将来は、日本語と英語の2ヶ国語を使いながら、ホテルや旅行関係の会社で、マーケティング部のマネージャーとして仕事をするのが夢です。

今のOGU学生に伝えたいことは、「色々なことに挑戦して、たくさんの人たちと出会い、充実した4年間を過ごしてください」ということです。留学に興味があるなら、OGUの素晴らしい交換留学プログラムを使って、世界中の人々と交流してみてください。それが新しい夢を見つける一歩になり、さらにあなたの視野や世界が広がります。皆さんがOGUで素晴らしい学生生活を送れるように応援しています。



ハワイカイにあるマリナーズリッジへハイキング

目次:

Hello from All Corners of the World!	1-3
派遣交換留学生 2013-2014	3
I-Chat's Global Language Camp	4
受入交換留学生 2013-2014	4
私のおススメ in China	4



みずき



中川 瑞己 (2012年外国語学部卒業)



ドイツで出会った台湾人の友人と(本人右)

現在、台湾の彰化(ジャンホウ)という街にあるYMCAで日本語教師として働いています。今年で、教師生活2年目になりますが、今でも毎日が失敗と学びの連続です。

台湾で働こうと思ったきっかけは、大学時代にドイツのトリア大学に交換留学をし、そこで台湾人学生に出会ったことです。台湾人の心の温かさに触れた時から、「いつか絶対に台湾へ行こう」と心に決めていました。今、それが現実のものとなり、さらに仕事をしながら台湾で生活ができるなんて、まるで夢のようです。

大学では外国語学部英語学科に所属しながら、日本語教育を副専攻として勉強していました。ただ、実際に教師として学生の前に立つのは台湾に来てからが初めてで、授業の進め方

も、教室運営も、どうすれば良いかわからず、右往左往していました。さらに、去年赴任したばかりのころは、中国語がさっぱりわからず、日常生活でも困ることがたくさんありました。とりわけ教室内での学生とのコミュニケーションに苦労しました。長く日本語を習っている人でもまだまだ流暢に話せない人たちもいて、その人たちをどう指導したらよいか、最初は戸惑いました。また、中国語を勉強しようにも、毎日の授業準備に時間がかかり、そんな余裕もありませんでした。

それでも、途中で帰りたくなったり、仕事が嫌になったりすることはありませんでした。むしろ言葉も文化も全く違うこの環境を楽しむことができ、言葉もできないのに、自分でも驚くほど度胸が据わっているなどと思います。これも大学時代に交換留学で海外に飛び出した経験があったからこそだと思います。言葉に自信がなくても、その国のことをあまり知らなくても、とりあえず飛び込んでみる。これを学生のうちに経験できたのは、自分にとって大きかったです。また、中国語ができなれないながらも、2年目に入ってから私の中国語もずいぶんと上達しました。自分で言うのも何ですが、他の外国語を勉強したことがあるので、上達が早いように感じます。

大学時代を振り返ると、OGUの交換留学プログラムを利用してドイツに行かなかったら、こうして台湾で仕事をすることもなかったかもしれません。1年間の海外留学が、将来の選択に大きく影響したことは、間違いありません。

予定では、台湾での滞在は2014年3月までです。今後も、ここでの生活を楽しみながら、プロの日本語教師として、誰に見られても恥ずかしくない授業ができるように、日々勉強していきたいと思っています。



(上) 台湾での授業風景

(下) 浴衣の着付けイベントで生徒たちと(本人左から2人目)

● 高木 和俊 (2012年国際学部卒業)

私は、現在、京都にあるNGO法人テラ・ルネッサンスでインターンシップをしています。今年の8月にインターンとして、団体が支援センターを持つウガンダで2週間ほどのヒアリング調査を行ってきました。今回は、主にそれについてお伝えします。



支援センターで元子ども兵たちの子どもたちや地域の子どもたちと(本人中央)

インターンシップについて

本題に入る前に、まずは、なぜ大学を卒業後にNGOでインターンシップをしているのかを説明します。私は高校生の時に、初めてテレビでJICAの青年海外協力隊のことを知りました。世界には様々な問題があることを知り、それが国際協力・援助に関心を持つようになったきっかけでした。「学校に行きたくても行けず、食べたくても食べられない人」がこの地球上にいることを知り、苦しんでいる人や困っている人が再び立ち上がり、新しい一歩を踏み出す手伝いが自分にもできないかと思い、いつかは青年海外協力隊に参加して、それを実現させたいと考えました。しかし、「人のために何かをするには、まず自分が知識を身につけ、自身を磨かなくてはいけない」と思い、大学で国際学を専攻し、基礎的な知識を身につけることにしました。大学ではオープンキャンパススタッフ、交換留学生の生活サポートチーム、留学生交流イベントの企画などに参

加し、「ダイヤはダイヤで磨かれ、人は人で磨かれる」という言葉があるように、一心不乱に様々なことに挑戦し、大学の4年間を過ごしました。卒業後に長年の夢であったJICAの青年海外協力隊に応募しましたが、残念ながら経験不足から不合格でした。今は、来年、再び青年海外協力隊に挑戦すべく、インターンシップで経験を積んでいます。

インターンシップは無給ですが、昼食・交通費の補助があります。お金は貰えませんが、NGOがどのように運営され、活動しているのかを実際に見ることができ、多くのことを学ぶことができます。私が所属しているテラ・ルネッサンスでは、カンボジアとラオスで地雷やクラスター爆弾の被害者への支援、ウガンダとコンゴで元子ども兵の社会復帰支援、国内では岩手の刺し子プロジェクトなどの活動をしています。私がやっているのは、主にブログの更新と基本的な事務作業ですが、今後は募金箱プロジェクトなどにも携わる予定です。



ウガンダの印象

今年の8月に約2週間のインターン生としてウガンダを訪れました。出発前は初めてのアフリカ大陸訪問への不安と「アフリカに行ける！」という嬉しさが入り混じった気持ちでした。ウガンダに着いて最初の驚きは、着陸直後の機内でした。「パチパチパチ」と音がしたと思ったら、機内の乗客が拍手をしていました。おそらく無事に着陸したからだと思いますが、僕も遅れて拍手をしました。空港からバンでホテルに向かう道中、窓の外の赤い土と豊かな自然、高層ビルや高い山などに遮られることのない広く青い空に感動しました。これまでは、アフリカと言えば、貧困や飢餓というようなマイナスのイメージしかありませんでしたが、やはり実際に自分の目で見て、自分の肌で感じるのが大切だと改めて感じました。

ウガンダの首都カンパラは、想像以上に都会の街で、中古の日本車や運送トラックがたくさん走っていて、大型ショッピングモール、ホテル、ゴルフ場などもありました。街が人で賑わっている一方で、物乞いや物売りをしている子どもたちなども見かけました。

また、カンパラから北部のグルに向かう道で、タンクを持った女性や子どもたちが水を汲みに歩く光景や早朝から舗装のされていない道を歩く制服姿の子どもたちも見かけました。首都のカンパラと言葉や文化の違うアチオリ族が住む北部のグルを比べると街の造りや民家の様子がかなり違いました。

さらに、ウガンダは、今もヨーロッパによる植民地時代の影響を受けていると感じました。肥沃な大地のおかげで、作物や牧畜などの第一次産業は盛んですが、大型ショッピングモールなどは外資系で、中で販売されている製品も海外の物がほとんどです。ウガンダの人たちの主な収入源は農業のため、安定した

高収入を得る仕事に就くのは、まだまだ狭き門のようです。

ウガンダでの支援活動

NPO法人テラ・ルネッサンスが支援する元子ども兵の社会復帰センターは、ウガンダの北部グルにあります。子ども兵とは、正規、非正規を問わず軍隊に所属する18歳未満の子どもを言い、少年だけでなく、少女も含まれています。子どもの頃に反政府軍によって拉致されて、強制的に戦闘に参加させられた子どももいれば、家族を反政府軍に殺されたり、反政府軍から初めに受ける命令が「両親を殺せ」と言われる子どももいたり、過酷な経験をした子供たちばかりです。世界には今も約25万人の子ども兵士がいると言われています。帰還後の元子ども兵は、肉体的・精神的な傷を負っているだけでなく、戻っても近隣住民から差別され、コミュニティにスムーズに戻れなかったり、安定した職に就けずじまいすることも多いようです。

ウガンダ北部のグルにある社会復帰センターでは、このような経験をしてきた元子ども兵が、貧困から抜け出し、自立して生活できるように、基礎教育を受け、洋裁、木工、大工などの能力を身に付ける支援をしています。支援は3年間行われ、BHN(ベーシックヒューマンニーズ)支援や社会心理(カウンセリング)支援を受けた後、最終的にはマイクロクレジット(少額融資)により小規模ビジネスを立ち上げて、経済的に自立することを目指します。さらには、アチオリ文化の伝承、歌やダンスなどを通して文化活動を行ったり、コミュニティへの復帰も支援したりしています。

実際に元子ども兵の話を聞いて感じたのは、拉致され、兵士になった年齢や年数、性別によって経験は様々だということです。反政府軍に長い期間いた人は、軍の中で位が上

がり、命令する立場までいたり、家族を殺されたり、女性の場合は性的暴力を受けたり、さらには子どもを身ごもった状態で帰還して、困難な生活を強いられることもあります。彼らの経験はあまりに恐ろしく、過酷で、私の想像をはるかに超えていました。しかし、彼らの中に、その過去と向き合い、ひたむきに、そして力強く生きようとする「力」を感じました。今も、彼らが再び立ち上がり、一歩踏み出すために、自分が手伝えることは何なのかを自問し続けています。

私は、今後も国際協力・援助に携わり、特に草の根のNGO職員として働きたいと考えています。もちろん問題は海外にだけあるわけではありません。日本を含めた世界中にある不公平、不均衡を変え、すべての人が生きる価値を見出せる社会を作れるような人間へと成長したいです。

後輩のみなさんも大学生活の中でたくさんの事に挑戦してください。そしてキャンパス内だけではなく、自分の周囲にアンテナを張り、様々なことに関心を持ち続けることが大切だと思います。



(上) 赤土の街の様子
(下) 社会復帰センターでダンスを披露する子どもたち

2. 派遣交換留学生2013-2014



出発前の派遣交換留学生たち

今年は、30名の交換留学生が、それぞれの派遣先へ出発しました。彼らは、アメリカ、カナダ、フランス、ドイツ、フィンランド、オランダ、中国(香港)、台湾、韓国、オーストラリアにある16の提携大学で学んでいます。海外で生活するのは、数日旅行で滞在するのとは違い、想像以上に大変なことがたくさんあります。今年も到着時にいきなりスーツケースが届かなかったり、大学に着いてみたらこんなはずではなかったと思うようなことが起こったり、みんな大なり小なりトラブルに直面しています。それでも「Trouble is welcome!」を合言葉に、笑いあ

り、涙ありの留学生活を送っています。

彼らの現地での様子は、今後もこのニュースレターに掲載するとともに、国際センターブログ「Taking Off」で随時ご覧いただけます。
<http://inoffice.blog102.fc2.com/>
コメントを書込むこともできますので、学生たちに励ましの言葉を掛けていただければ幸いです。Troubleをバネに、彼らがどんな風に、どれだけ成長して帰国するのか、今から楽しみます。

3. I-Chat's Global Language Camp

今 年5月に、I-Chat Loungeで初めてのGlobal Language Campを開催しました。I-Chatが目標にしていることはたくさんありますが、その中の一つが円満なグローバルシチズンの育成です。このイベントでは、学生たちがグローバルシチズンを目指して、世界の様々な言語や文化と一緒に楽しく学びました。

この初めてのGlobal Language Campには、OGU学生のみならず、多くの留学生も参加し、英語、中国語、韓国語、ドイツ語、フランス語、スペイン語を実践的に学びました。キャンプの開始に当たり、全員が「パスポート」を受け取り、ベルの音と共に、世界を巡る旅が始まりました。

それぞれの「国」のブースでは、歌を歌ったり、会話をしたり、インタラクティブな言語ゲームをしたり、それぞれの国や言葉に関連したドラマを見たりと、様々なアクティビティが準備されていました。学生たちは、ブースで6ヶ国語の挨拶や自己紹介の仕方を学ぶだけでなく、音楽やインターナショナル・フードを体験し、最後にパスポートに国旗のシールを貼ってもらい、旅を終了しました。今回、I-Chatのスタッフだけでなく、OGUの教員や海外からの留学生がブースを担当しました。全員が海外経験のあるバイリンガルやトリリンガルのグローバルシチズンで、自分が担当したブースの国の言葉が話すか、その国の出身者でした。グローバルな先生たちとコミュニケーションを取った参加者の一人は、「こんなに楽しく言語を学んだのは初めてです。外国語が話せるようになりたいと思います」とコメントしていました。

このようなキャンプ形式で学ぶことにより、学生たちはもっと外国語や異文化を学びたいと思うようになります。言語と文化は一体なので、このように、同時にたくさんの言語や文化が学べるイベントは、学生たちの世界に対



する好奇心を満たすには理想的です。世界から集まってきた人たちがお互いに話をし、学びあうというのが、日常のI-Chatの雰囲気ですが、このGlobal Language Campは、I-Chatの「グローバル・コミュニティ」をさらに拡大したように思います。

グローバルシチズンの育成は、今やどの大学でも目標となっています。I-Chatでは、この目標を達成するために、ユニークで、革新的で、楽しい学びの機会を学生に提供することが重要だと考えています。Global Language Campは、学生たちが外に行くことなく、まさに自分たちのキャンパス内でグローバルな学びを体験できる貴重な機会なのです。

(I-Chat Lounge ディレクター/外国語学部准教授 ステラ・M・マックスウェル)



4. 国際交流プログラムスタート

9月2日に今年の国際交流プログラムがスタートし、OGUキャンパスに国費留学生2名を含む56名の留学生を迎えました。今年は、アメリカ、フランス、ドイツ、スウェーデン、フィンランド、アイスランド、オランダ、イタリア、チェコ、中国、台湾、韓国、タイ、シンガポールからやってきた留学生たちが、4ヶ月あるいは10ヶ月間、このキャンパスで勉強をします。すでに日本語が流暢な学生もいれば、今回、初めて日本に来た、あるいは日本語を勉強し始めたばかりという学生たちもいます。

今後、キャンパスで留学生たちを見かけたら、声を掛けてみてください。国際センターのある1号館1階やI-Chat Loungeに行けば、留学生に会える可能性大です。時には、教室の隣に座った学生が台湾や韓国、あるいはスウェーデンからの留学生なんてことがあるかもしれません。外国語が話せなくても、コミュニケーションを取ろうという熱意は、言葉を超えて伝わるはず。留学生たちは、常にOGU学生との交流を待っています！

国際交流は、あなたの小さな一歩から始まります。留学生を通して、もっと広い世界をのぞいてみましょう。



フィンランド(左)、チェコ(中央・右)の学生たち



オランダ(左)、イタリア(右)の学生たち



中国の学生たち

私のおススメ in China～孟 涛

奇岩奇峰と美しい山水林のある桂林は、中国では「桂林山水甲天下」と言われていて、これは「桂林の山水は世界一」という意味です。桂林の名前の由来は、桂樹(モクセイ)です。桂林に行くのなら、桂樹の花がちょうど満開になる9月下旬から10月がお勧めです。船でゆっくりと漓江(リジャン)を下ると、兩岸には無数の奇峰がそびえ立ち、幻想的な風景画の中に自分が入ってしまったような感覚に陥ります。桂林には、両江国際空港があり、上海や北京などからたくさんの直行便が出ています。ぜひ一度行って、美しい景色を見てください！(国際センター助教)



大阪学院大学／大阪学院大学短期大学部 国際センター

〒564-8511 大阪府吹田市岸部南二丁目36番1号

TEL: 06-6381-8434 (代表)

FAX: 06-6381-8499

Email: inoffice@ogu.ac.jp

国際センターBLOG“Taking Off”もご覧ください。
<http://inoffice.blog102.fc2.com/>